本発表では、「仏教と病」というテーマのもと、仏教哲学者ダルマキールティの主張を取り上げる。ダルマキールティは、『プラマーナ・ヴァールッティカ』（以下 PV）第２章において、病気の生起に関わる体内要素（doṣa, dhātu）について言及している。体内要素はヴァータ、ピッタ、カパの三つからなるが、これらがどのように欲望の生起に因果的に関与しているのかを論じるのが本発表の主たる目的である。

ダルマキールティは、PV 2.75-78 において、欲望の生起ばかりではなく、記憶の混乱や失神等の症状も心的現象として紹介しており、それら心的現象が体内要素の均衡などの身体、あるいは身体から派生したものから直接生じるわけではないという主張を展開する。つまり、身体は心の直接的な原因にはなりえず、心の原因は心であると説く。欲望の生起に関して言えば、快楽の認識が心的現象として欲望の生起の原因となり、体内要素の均衡などはそれに対して認識の対象として間接的に関与するにすぎない。

また、欲望の生起に対する体内要素の均衡などは、直接的に（dngos su, skt. *vastutaḥ）補助因（lhan cig byed pa'i rgyu, skt. *sahakārihetu）ではないが、間接的に心の変化を補助する（brgyud pas kyang phan 'dogs par byed pa, skt. *paramparayopakāraka）と PV の注釈家らによって表現される。この「直接的に補助因である」と「間接的に補助する」という両表現の本質的な違いについても考察した。

この両表現は似ているようで決定的な違いがある。第一に、前者では「直接的に」補助因ではないと言われているが、後者では「間接的に」補助すると言われている。第二に、前者では一貫して「原因」に相当する語が用いられていないが、後者では補助「因」として「原因」に相当する語が用いられている。なお、ダルマキールティの別の作品『ヘートゥ・ビンドゥ』（以下 HB）で、前者で用いられている *saha-√kṛ（tib. lhan cig byed pa）と後者で用いられている upa-√kṛ（tib. phan 'dogs par byed pa）は同様の意味で用いられており、ここでも本質的な意味の違いはないと仮定した。

HB において「補助因」は質料因と共働して＜単一の結果を生じさせるもの＞として描写されている。また、PV の注釈者であるマノーラタナンディンによると、質料因と同様に、直後の結果と必然的な因果関係を有することが、補助因の条件であるとされる。ダルマキールティ自身の言葉からは直接見いだせないが、体内要素やその変化は、欲望の生起に対してこうした補助因の条件を満たさないために、「直接的に補助因」ではなく、「間接的に補助する」と PV の注釈家たちによって表現されているのではないかと推測した。

キーワード：ダルマキールティ、体内要素、補助因